

西南学院大学 国際文化論集 第二十卷 第二号 一三九―二七五頁 二〇〇六年二月

日本組合基督教会系新聞に見る基督教々育同盟会 (二)

塩 野 和 夫

はじめに

「日本組合基督教会系新聞に見る基督教々育同盟会」(以下、基督教々育同盟会を「教育同盟会」と略記する)について、これまでに二度論文を発表した。本稿はその続編であり、完結編でもある。

「日本組合基督教会系新聞に見る基督教々育同盟会 (一)」(『国際文化論集』第十八卷第二号、所収)では、調査対象を一八九九年から一九〇六年三月までとし、教育同盟会設立に至るいきさつを検討した。「日本組合基督教会系新聞に見る基督教々育同盟会 (二)」(『国際文化論集』第十九卷第二号)では、教育同盟会設立(一九〇六年四月)以降一九二六年までを対象として、比較的順調に推移した時期について検討した。その結果、この時期には個々のキリスト教系学校や日曜学校協会などとキリスト教教育という活動目標を共通にする一面が確認できた。他方、教会同盟会や基督教連盟などとは時事問題を取り上げ検討するという共通性があった。この期間はいわゆる戦

前と戦中における活動期間のほぼ半ばに相当する。

本稿は一九二七年から一九四二年九月までを検討対象とする。その期間は戦前・戦中における活動期間の後半期に当たり、いわゆる十五年戦争（一九三一年―一九四五年）とほぼ時期が重なる。なお、一九四一年六月に日本基督教団が成立したため、日本組合基督教会は解散した。そのため、一九四二年の新聞発行所は「日本基督教団第三部事務所」となっている。また、新聞の名称は『基督教世界』を継承したが、号数は『日本メソジスト時報』の号数を引き継いだ。そのため、一九四二年の新聞号数はそれまでの『基督教世界』からは食い違っている。

本稿で抽出した関連記事の分類は、これまでの論考との一貫性を考慮して、従来の分類に従った。

一 関連記事の分類

→ 関連記事の抽出

検討対象とする時期の新聞名称は、いずれも「基督教世界」である。また、関連記事として抽出する分類は従来のもので従った。次の通りである。

- A 基督教々育同盟会に関する記事
- B キリスト教系学校に関する記事
- C 日曜学校協会などキリスト教教育に関する記事
- D キリスト教の団体や運動に関する記事

- E 皇室や神道に関する記事
- F その他、関連記事

抽出した関連記事数を表記したものが、「表一 日本組合基督教会系新聞における基督教々育同盟会関連記事一九二七年から一九四二年九月」である。

表一 日本組合基督教会系新聞における基督教々育同盟会関連記事 一九二七年から一九四二年九月

年	一九二七	一九二八	一九二九	一九三〇	一九三一	一九三二	一九三三	一九三四	一九三五	一九三六	一九三七
記事数	六九	八六	九四	一一四	一三四	九六	九一	六五	一〇五	四一	五六
累計	六九	一五五	二四九	三六三	四九七	五九三	六八四	七四九	八五四	八九五	九五一
年	一九三八	一九三九	一九四〇	一九四一	一九四二						
記事数	五九	一一一	一二七	九四	七六						
累計	一〇一〇	一一二一	一二四八	一三四二	一四一八						

「表一」に挙げた記事数は、教育同盟会に関係する記事をすべて抽出したものではない。しかし、主要な関連記事はほぼ抽出した。また、記事数も教育同盟会の動向を把握するには十分であろう。そこで、それぞれの事項に関する動向及び各事項と教育同盟会の関連を考察することは、抽出した記事で可能だと考えられる。

△ 関連記事の分類

「表一」は、教育同盟会に関連した記事数を年毎に表記したものである。したがって、関連記事の全体的な動向の姿を「表一」で把握することはできる。しかし、記事の内容は「表一」だけでは分からない。関連記事の内容を知るためには、「A 基督教々育同盟会に関する記事」から「F その他の関連記事」の分類にしたがった区分が必要となる。そこで、教育同盟会関連記事を「A」から「F」の分類に従って区分した。「表二 基督教々育同盟会関連記事の分類 一九二七年から一九四二年九月」である。

表二 基督教々育同盟会関連記事の分類 一九二七年から一九四二年九月

*各項目の合計数の左横に（ ）内に入れた数字がある。この数値は一九一〇年四月から一九二六年までの同じ項目の記事合計数である。

	A 基督教々育同盟会に関する記事	B キリスト教系学校に関する記事	C 日曜学校協会などキリスト教教育に関する記事	D キリスト教の団体や運動に関する記事	E 皇室や神道に関する記事	F その他の関連記事	合計
一九二七	一	一二	九	三一	七	九	六九
一九二八	〇	一五	一一	一三	一三	一四	八六
一九二九	二	二六	八	三四	八	一六	九四
一九三〇	一	一三	四	四四	二四	二八	一四四
一九三一	一	三三	一三	四七	三	三七	一三四
一九三二	三	二四	五	三八	七	一九	九六

	(二八)	(三〇二)	(一一一)	(四九七)	(一三四)	(三四六)	(一四一八)
一九三三	四	一三	二	三三	四	一五	九一
一九三四	四	一〇	九	三一	五	一六	六五
一九三五	〇	四〇	二	三六	八	二二	一〇五
一九三六	三	一六	四	二一	三	一七	四一
一九三七	一	一一	一	二一	一	一七	五六
一九三八	二	一一	一	二一	一	一四	五九
一九三九	三	一一	六	三一	五	四三	一一一
一九四〇	二	一一	五	三三	一八	四七	一二七
一九四一	〇	一三	一〇	四三	三	二五	九四
一九四二	一	九	三	二一	五	三七	七六
合計	(二八)	(三〇二)	(一一一)	(四九七)	(一三四)	(三四六)	(一四一八)

「表二 基督教々育同盟会関連記事の分類 一九二七年から一九四二年九月」の分析をここでは簡潔に行っておく。

「A 基督教々育同盟会に関する記事」はやはり少ない。しかし、前半期(一九一〇年四月―一九二六年)と比べると、約三倍に増えている。増加した理由は何だろうか。まず、前半期に多く掲載されていた教育同盟会総会の記事が、それ以上の頻度(二七年、二九年、三一年、三三年、三四年、三六年、三年、三九年)で掲載されていることがある。また、総会以外で教育同盟会が催した夏期学校などのプログラムが新たに掲載されている。さらに教育同盟会が関係した行事で記事とされたものがある。これらの記事は、後半期に入るとキリスト教教育の分野で教育同盟会が存在感を増していた事実を示していると思われる。なお、教育同盟会の動向を知るために追加資料を用

いる。¹⁾

「B キリスト教系学校に関する記事」は、前半期と比較すると若干記事数を減らしているが、なお記事数は多い。前期と比較して明らかな変化は、掲載される記事に組合教会系学校への集中が目立つことである。たとえば、「表三」を見ると梅花女学園関連の記事が多く、「表四」では同志社関連の記事が多くなっている。戦時体制下にあった組合教会系学校を報道する必要性が増したのかもしれない。

「C 日曜学校協会などキリスト教教育に関する記事」が、記事数を大きく減らしている。なぜだろうか。前半期ではキリスト教宣教の中心的な組織、あるいは活動の担い手として日曜学校が注目されていた。後半期にも日曜学校活動の関連記事は掲載されている。しかし、その扱い方は明らかに前半期のようなのではない。戦時体制下においては、広範なキリスト教活動よりも新しい状況に対応する組織や活動に関心が向いた。そのために、「C」の記事数は低下したと考えられる。

「D キリスト教団体や運動に関する記事」は、後半期に最も記事数を増やしている。なぜだろうか。後半期における「D」の特色としてまず、前半期で扱っていた団体（基督教連盟、共励会、矯風会、禁酒運動など）が後半期にも取り上げられていることがある。また、後半期に活動を始めたいくつかの団体（労働者ミツシヨ、神の国運動、社会的基督教、福音学校など）が注目されたこともある。さらに『基督教世界』が、戦時体制下における基督教諸団体の動向を多く取り上げたことがある。

「E 皇室や神道に関する記事」は若干記事数を減らしている。しかし、「E」に分類された記事が持つ意味はむしろ重くなっている。すなわち、前半期と同様に天皇の代替わりに伴う出来事などが報じられる一方で、一九三

〇年代に入るとキリスト教系学校の存立に関わる事柄として神社問題が掲載されるからである。

「F その他の関連記事」は、「A」「D」と同様に後半期に記事数を増やしている。「表三」と「表四」を見ると、この時期には様々な出来事や主張の多くが「F」の項目にまとめられている。『基督教世界』は一九三〇年代前半までキリスト教の立場から平和などについて報道し、論じている。しかし、三〇年代後半になると、記事内容は戦時体制に迎合したものに变化していく。そのような中でなおキリスト教の立場から確保できた内容があったとすれば、それは何なのかが問題となる。

㉒ 史料と論説

抽出した記事には多くの史料と論説が含まれている。これらは本稿において基本的な検討対象となるだけでなく、近代日本キリスト教史研究においても価値がある。そこで、史料の一覧表として「表三 日本組合教会系新聞（一九二七年―一九四二年九月）の基督教々育同盟会関連記事における史料一覧表」（一九二七年―一九四二年九月）の基督教々育同盟会関連記事における史料一覧表」を、論説の一覧表として「表四 日本組合教会系新聞（一九二七年―一九四二年九月）の基督教々育同盟会関連記事における論説一覧表」を、作成した。なお、「発行年月日」はいずれも西暦を用い、冒頭の「一九」を省略している。

表三 日本組合教会系新聞（一九二七年―一九四二年九月）の基督教々育同盟会関連記事における史料一覧表

A 関連記事	番号		発行年月日	項目	表題
	番号	号数			
四八五	三五四	二四四一	三〇年一月一三日	教報	基督教々育同盟総会（長谷川初音） 大阪に開かれた基督教々育同盟総会
	二四九四	二四九四	三二年一月一九日		

九四	二二二四	二八年五月一七日	教界	梅花女学校通信
一六三	二五三〇	二九年一月三一日	教界	四国唯一の基督教主義松山女学校の教育方針並実際
一八八	二三五八	二九年三月二八日	教界	同志社神学部卒業生四国伝道旅行記
四五二	二四七八	三一年七月三〇日	教界	日本組合基督教会第一回関係諸学校連合教師修養会 (詳報)
四七〇	二四八八	三一年一〇月八日	教界	基督教保育連盟の成立
五一七	二五〇八	三二年三月三日	教報	基督教主義学校代表者協議会
五二九	二五一四	三二年四月二四日	教報	神戸女子神学校社会事業科特設について
七三〇	二六三五	三四年八月二三日	教報	今夏に於ける女子神学校の成果
七八三	二六六九	三五年四月二五日	教報	梅花女学校通信
七九四	二六七四	三五年五月三〇日	教報	同志社創立六十周年記念学術連続講演
八一八	二六八四	三五年八月八日	教報	基督教主義学校教育の徹底を討議
八三五	二六九四	三五年一〇月一七日	教報	学校内宗教教育協議会
八五〇	二七〇一	三五年一二月五日	教報	全国基督教協議会と基督教連盟総会(今泉)
九〇七	二七〇一	三七年三月二五日	教報	同志社教育綱領
九一四	二七七四	三七年五月一三日	教報	創立六十周年を祝した大阪に於ける女子教育の先駆
九七九	二八三一	三八年六月二三日	教報	梅花高等女学校
一〇〇三	二八五〇	三八年一月三日	教報	梅花学園通信
一〇〇九	二八五六	三八年一月一五日	教報	梅花学園通信
一一二五	二九〇九	四〇年一月一日	教報	梅花学園通信
一一七四	二九二五	四〇年四月二五日	教報	梅花学園通信
一二〇七	二九四一	四〇年八月一五日	教報	組合教会関係諸学校連合第十回宗教教育協議会懇談会
一二一一	二九四二	四〇年八月二三日	教報	組合教会関係諸学校連合第十回宗教教育協議会懇談会二

番号	号数	発行年月日	項目	表題
五五〇	二五二五	三二年六月三〇日	夏の催し	日本基督教々育同盟関西教育研究委員会
五六三	二五二九	三二年七月二八日	夏の催し	基督教学校教師夏期学校
五六四	二五三一	三二年八月一日	教界警見	御殿場に於ける基督教々育同盟会主催の夏期学校
六二五	二五六九	三三年五月一日	教界警見	基督教々育同盟の夏季プログラム定る
六五九	二五八七	三三年九月一四日	教界警見	基督教々育同盟第二十二回総会
六八四	二六〇一	三三年一二月二一日	教界警見	教育同盟役員
七二八	二六三三	三四年八月九日	教界警見	基督教教育同盟主催御殿場夏期学校(南石)
七四六	二六四六	三四年一月八日	教界警見	基督教教育同盟会の総会
八七六	二七二二	三六年五月七日	教界警見	時局に対する基督教学校の態度等をも協議した委員会
八八五	二七三六	三六年八月一三日	教界警見	御殿場東山荘に於ける基督教学校校長会
九五七	二八一	三八年二月三日	教界警見	時局と基督教学校の問題を懇談した全国基督教教育同盟理事會
九七八	二八三〇	三八年六月一六日	教界警見	緊急裡に協議を進めた基督教教育同盟会
一〇六三	二八八五	三九年七月一三日	教界警見	国民教育に関する宗教的指導に関する進言
一〇七〇	二八八八	三九年八月三日	教界警見	日米通商条約破棄ニュース報道下の基督教々育同盟会主催 基督教主義学校協議会
一一一八	二九〇六	三九年一二月七日	教界警見	第二十七回基督教教育同盟会総会(T生)
一一八六	二九三九	四〇年六月一三日	教界警見	基督教教育家と文部大臣の会見
一二一四	二九四五	四〇年九月二日	教界警見	樹立されんとする基督教新体制(抱石生)
B 関 連 記 事				
五	二二四七	二七年一月二七日	教界	新同志社の建設
一	二二四八	二七年二月三日	教界	梅花女学校通信
二	二二八〇	二七年九月一五日	教界	梅花女学校近況
七	二二九七	二八年一月一九日	教界	宗教教育調査並びに梅花女学校通信

番号	号数	発行年月日	項目	表題
二二三七	二九五四	四〇年一月一四日	教報	同志社神学部学科改定について(佐野勝也)
二二五九	二九六五	四一年二月六日	教報	同志社大学神学科課程の改正
二二六六	二九七〇	四一年三月一三日	教報	興亜神学科聴講制の新設
二二七八	二九七七	四一年五月一日	教報	同志社の近況
二四	二二五八	二七年四月一四日	教界	日本日曜学校協会第十六回大会
五二四	二五一一	三二年三月二四日	教報	日曜学校協会京都連盟総会
七四九	二六四八	三四年一月二二日		日本日曜学校協会に於ける決定の諸事項
七八七	二六七一	三五年五月九日		第二十二回日本日曜学校大会(S・N生報)
八三三	二六九四	三五年一〇月一七日		日曜学校教育協議会
九一一	二七七一	三七年四月二二日		名古屋に開かれたる第二十一回日曜学校大会
一〇四一	二八七二	三九年四月一三日		第二十二回日本日曜学校大会記
			基督教連盟	
D 関連記事	四	二二四六	宗 教 法 案 と 教 界	基督教連盟 宗教法案に対する組合教会の行動 名古屋基督教連盟の成立 世界宣教会議(詳報) 大阪市基督教連盟起草案 廃娼大会(郭清矯風連合年会)(西内) 日暮里愛隣団セツルメント 第五回基督教連盟総会記事(詳報) 貧民街の十年(富田栄子) 同志社労働者ミツシヨンの設立 北海道共励会大会

九八	二二二六	二八年五月三一日	教界	京都青年連盟会発会
一〇三	二二二九	二八年六月二日	教界	全国基督教協議会(詳報)
一〇四	二二二九	二八年六月二日	教界	第一回基督教音楽夏期講習会
一〇五	二二二〇	二八年六月二八日	教界	全国基督教協議会(続報)(詳報)
一一一	二二二三	二八年七月九日	教界	四国共励会連盟大会
一一一	二二四一	二八年一月二二日	教界	北陸連合共励会創立
一五二	二三四二	二八年一月二九日	教界	第六回日本基督教連盟総会(詳報)
一六八	二三五二	二八年二月七日	教界	仏耶両信者を中心として京都廢娼期成同志会生む
一九七	二三六二	二九年四月一八日	教界	公娼制度廃止運動京都実戦記(駒井静江)
二一〇	二三七〇	二九年六月二〇日	教界	東京基督教女子青年会
二二四	二三七八	二九年八月一五日	教界	第四回廢娼同志大会
二四〇	二三九〇	二九年一月一四日	教界	社会問題協議会
二五一	二三九七	三〇年一月九日	教界	神の国運動宣言
二八三	二四〇九	三〇年四月三日	教界	神の国運動宣言文(抜粋)
三三九	二四三五	三〇年一〇月二日	教界	国際連盟宗教委員会の軍縮に関する決議
三四七	二四三九	三〇年一〇月三〇日	教界	諸教派合同に関する共同調査委員会の修正案
四二〇	二四七〇	三一年六月四日	教界	第八回日本基督教連合総会
四四七	二四七七	三一年七月二三日	教界	連合共励会運動近況(重松幹事)
四五二	二四七八	三一年七月三〇日	教界	第一回農村問題協議会宣言
四七一	二四八八	三一年一〇月八日	教界	第四十一回基督教青年会夏季学校宣言書
四七二	二四九〇	三一年一〇月二二日	教界	社会的基督教関西連盟成る
四七六	二四九一	三一年一〇月二九日	教界	青年信徒連盟全国大会(錦織幹事)
五〇七	二五〇五	三二年二月一日	教報	満州事変と基督教連盟 第六回京都青年連盟総会

番号	号数	発行年月日	項目	表題
五〇八	二五〇五	三二年二月一日	教報	日本福音学校開校
五三二	二五一五	三二年四月二日	教報	盛大なる第一回市民福音学校
五三三	二五一六	三二年四月二八日	声明書	欧米各国基督教団体に対して 日本基督教連盟 常議員会
五三五	二五一六	三二年四月二八日	教報	時局に関する進言 日本基督教連盟常議員会
五三九	二五一九	三二年五月一九日	教報	活気に溢れつつ開校中の市民福音学校
五四六	二五二三	三二年六月一六日	教報	非常時に開会されんとする組合教会総会の新しき試み(左)
五五五	二五二七	三二年七月一四日	教報	日本国民禁酒同盟が非常時五カ年禁酒即行を齋藤首相に陳情
五五九	二五二八	三二年七月二一日	教報	全国廢娼同志大会の宣言と声明書
五六七	二五三三	三二年八月二五日	教報	第一回基督教保育連盟講習会
五八三	二五四五	三二年一月一七日	教報	神の国運動の二カ年継続を決議す
五八八	二五四八	三二年二月八日	教報	全国基督教協議会宣言並決議
五八九	二五四八	三二年二月八日	教報	平和確保に関する宣言 全国基督教協議会、日本基督教連盟
六五四	二五八二	三三年八月一〇日	教報	日本基督教会同盟規約
六六八	二五九五	三三年一月九日	教報	基督教国民更正大運動
六七五	二五九七	三三年一月二三日	教報	日本基督教連盟総会(詳報)
七三五	二六四〇	三四年九月二七日	教報	万国婦人矯風会の純潔運動
七四八	二六四八	三四年一月二二日	教報	基督教連盟の総会
七五六	二六五九	三五年二月一四日	教報	教会合同運動宣言
七七五	二六六六	三五年四月四日	教報	国民純潔同盟成る
八三〇	二六九一	三五年九月二六日	教報	社会事業大会と禁酒運動

八三九	二六九五	三五年一〇月二四日	教報	基督教教会合同案成る
八五八	二七〇八	三六年一月三〇日	教報	婦選獲得同盟の方針
八七一	二七一七	三六年四月二日	教報	婦人矯風会第四十五回大会
八九四	二七五二	三六年一月二三日	教報	国民純潔運動の関西大会概況
八九九	二七五七	三七年一月一四日	教報	国民禁酒同盟の陳情 禁酒徹底を建議して司法大臣に
九二六	二七八八	三七年八月一九日	教報	皇軍慰問事業部 慰問袋内容の参考
九二七	二七九〇	三七年九月二日	教報	基督教連盟の皇軍慰問事業部
九四一	二七九六	三七年一〇月一四日	教報	支那事変に関する声明 第五十三回日本組合基督教会総会
九四二	二七九六	三七年一〇月一四日	教報	時局に関する申合 日本組合基督教会
九四六	二八〇〇	三七年一月一日	教報	皇軍慰問に関する連盟今後の対策
九四九	二八〇三	三七年一月二日	教報	日本基督教連盟第十五回総会
九五一	二八〇四	三七年一月二日	教報	基督教連盟の時局に関する声明
九七七	二八二九	三八年六月九日	教報	国民純潔同盟の性病予防運動
九九四	二八四三	三八年九月一日	教報	精神作興週間と国民禁酒同盟
一〇二六	二八六五	三九年二月二三日	教報	陸軍記念日の行事について
一〇四五	二八四五	三九年五月四日	教報	軍用動物献納運動提唱
一〇四七	二八七六	三九年五月一日	教報	海軍記念日の行事について
一〇八〇	二八九一	三九年八月二四日	教報	日本基督教連盟と朝鮮基督教連合会との協力覚書
一〇八三	二八九二	三九年八月三一日	教報	国民精神総動員新展開の基本方針に対する基督教の実施教化案 日本基督教連盟
一〇九八	二八八九	三九年一〇月一九日	教報	『世界禁酒日曜日』運動要項
一一〇六	二九〇二	三九年一月九日	教報	第十七回日本基督教連盟総会開かる
一一一六	二九〇五	三九年一月三〇日	教報	国民純潔運動全国協議会概況

			E 関連記事			
番号	号数	発行年月日	項目	表題		
一三三二	二九一一	四〇年一月一八日	教界動向	同志社大学社会事業教育後援会事業の進展		
一一七六	二九二六	四〇年五月二日	教会通信	社基大会及び特別講演会		
一一八三	二九三二	四〇年六月一日		全鮮基督教連合会第3回総会		
一一九四	二九三六	四〇年七月一日		第五十回基督教青年会夏季学校		
一二二八	二九五〇	四〇年一月一七日		教会合同問題		
一二三〇	二九五五	四〇年一月二四日		教会合同の宣言発表		
一二四六	二九五九	四〇年一月一九日		信仰箇条の草案について(山口金作)		
一二五五	二九六四	四一年一月三日		京城における青年会連盟大会		
一二八一	二九七九	四一年五月一日		苦難の時代的理解 社基大会の主題		
一二八三	二九八〇	四一年五月二日		日本基督教団創立総会		
一二八四	二九八〇	四一年五月二日	教報	第五回朝鮮基督教連合総会		
一二九一	二九八六	四一年七月三日		「日本基督教団」成る 創立総会概況		
一二九三	二九八七	四一年七月一日		日本基督教団創立を祝す 文部省宗教局長 阿原謙蔵		
一三〇二	二九九〇	四一年七月三十一日		第三部諸教会の進むべき方針		
一三一三	二九九五	四一年九月四日		基督教報国団の結成		
一三一四	二九九七	四一年九月八日	教報	日本基督教連合会 日本基督教連盟の新名称		
一三一七	二九九八	四一年九月二五日		基督教報国団組織		
一三二〇	三〇〇一	四一年一月一六日		非常時に対する基督者女性の心得		
一三二九	三〇〇五	四一年一月一日		寺院教会等の金属類回収実施要綱		
一三四八	三〇〇五	四二年二月五日		満州基督教開拓村		
一三六四	三〇〇五	四二年三月五日		満州基督教開拓村		
	(二五八三)	八		事態の変化と教会の用語		
一三七四	一一二	四二年四月二日		臨時体制下に於ける教会事業の様式について		
一三八一	一四	四二年四月一六日	教報	南京日華基督教連盟の創立		
一三八四	(二五八九)	一五	教報	強化奉公を目ざし朝鮮基督教連合総会		
一四〇三	(二五九九)	二四		満州基督教開拓村 順調に進展す		
一	二二四四	二七年一月一日		奉悼の辞		
一〇一	二二三八	二八年六月一日		御大典記念日本宗教大会		
一二六	二二三三	二八年一月四日	教界	京都における御大典記念伝道プログラム		
一二九	二二三六	二八年一月八日	教界	東京に於ける御大典記念基督教大伝道会		
一三二	二二三七	二八年一月二五日	教界	大阪市に於ける御大典記念協同伝道		
一五〇	二三四一	二八年一月二二日	教界	全国基督教徒御大典奉祝式における首相の祝辞		
二〇四	二三六七	二九年五月三日		七カ所に畏くも侍従御差遣		
二六一	二四〇〇	三〇年一月三日		神社問題に就いて		
二六五	二四〇一	三〇年二月六日		神社問題に就いて		
二九九	二四一七	三〇年五月二九日		神社問題に対する進言		
四一三	二四六八	三一年五月二日		大垣の美濃ミッションを教会と認めぬ 大垣市に於ける神社問題の余波		
五七二	二五四一	三二年一月二〇日		カトリック学生の神社不参拝問題		
五七九	二五四三	三二年一月三日		神社不参拝問題全国に波及? 教育界に問題続出		
六〇〇	二五五六	三三年二月九日		カトリックの御難 海星中学校からも配属将校を引揚ぐ		
六〇四	二五五七	三三年二月一六日		配属将校の引揚げから 上智大学さわぐ!		
六〇五	二五五七	三三年二月一六日		暁星中学校長が文部省へ嘆願書		

番号	号数	発行年月日	項目	表題
六九一	二六〇四	三四年一月一八日	廣告	四五〇団体を紀元節に表彰 同志社高商の神棚問題 国体明徴に関する再度の通牒 神社不参拝問題に対する朝鮮総督府の通牒 靖国神社の臨時大祭に際し全国民の黙禱を希望す 同志社御真影奉安殿
八〇一	二六七八	三五年六月二七日		
八三六	二六九五	三五年一〇月二四日		
八六七	二七一六	三六年三月二六日		
九六四	二八二二	三八年四月二二日		
九七五	二八二七	三八年五月二六日		
F 関連記事				
三五	二二六四	二七年五月二六日	彙報	国際宗教平和会議の議 宗教団体法案について 宗教団体法案にたいする修正意見 不戦条約と基督教会 芸妓検番及雇仲居俱樂部設置反対陳情書 日本宗教平和会議 米国中西部組合教会部会より日支両国同主義教会へ 送る平和メッセージ 時局問題と基督教 平和請願運動
一六二	二三五〇	二九年一月三一日	教報	文部当局を招いて宗教教育を懇談 独逸教会は合同して国教会を設立 国教会の建設にナチスの干渉はない カトリック教会へのナチス弾圧続く 母子保護法案の内容 北支事変に就きて文部当局よりの通達 海軍記念日
一六四	二三五五	二九年二月七日		
二四四	二三九三	二九年一月二五日		
二七七	二四〇六	三〇年三月一三日		
四一七	二四六九	三一年五月二八日		
四九七	二四九九	三一年一月二四日		
五一〇	二五〇六	三二年二月一八日		
五一九	二五〇九	三二年三月一〇日		
五四一	二五二〇	三二年五月二六日		
六三七	二五七六	三三年六月二九日		
六三八	二五七六	三三年六月二九日		
六四七	二五七七	三三年七月一三日		
九〇一	二七五八	三七年一月二二日		
九一九	二七八四	三七年七月二二日		
九七三	二八二五	三八年五月二二日		

九八〇	二八三二	三八年六月三〇日	教報	文部省が通牒せる事変一周年の記念実施要項 非常時に於ける国民の生活様式 軍事援護・傷兵保護につき三教代表者の協議会 時局の重大性と宗教家の奮起 再提案さるる宗教団体法案要旨 中支基督教工作について 興亜奉公日設定に関する件 興亜奉仕日の実施要項 銃後援強化週間実施について 国民精神総動員宗教家懇談会 宗教団体法施行に関する命令要綱成る 令旨奉体結核予防国民運動実施に就いて 紀元二六〇〇年新年奉祝実施に就いて 宗教団体法施行令(大要)
九八七	二八四一	三八年九月一日		
九九三	二八四三	三八年九月一五日		
九九七	二八四四	三八年九月二二日		
一〇〇四	二八五一	三八年一月一〇日		
一〇二一	二八六二	三九年二月二日		
一〇七六	二八九一	三九年八月二四日		
一〇八二	二八九二	三九年八月三一日		
一〇九三	二八九七	三九年一〇月五日		
一〇九四	二八九七	三九年一〇月五日		
一〇九七	二八九八	三九年一〇月二二日		
一〇九五	二九〇二	三九年一月九日		
一一一二	二九〇四	三九年一月二三日		
一一三七	二九一二	四〇年一月二五日		
一一四二	二九一三	四〇年二月一日		
一一六三	二九二〇	四〇年三月二一日		
一一八九	二九三三	四〇年六月二〇日		
一二二二	二九四七	四〇年九月二六日		
一二三三	二九四七	四〇年九月二六日		
一三一	二九九四	四一年八月二八日		
一三四〇	三〇一〇	四一年二月一八日		
一三五五	(二五八〇)五	四二年二月二二日		
			教報	大詔奉戴宗教報国全国大会 文部大臣訓令

表四 日本組合教会系新聞(一九二七年—一九四二年九月)の基督教々育同盟会関連記事における論説一覧表

番号	号数	発行年月日	項目	表題
一三五六	六	四二年二月一九日		大東亜戦争に対する心構え
一三七七	(二五八一)	四二年四月九日		翼賛選挙の誓
一四〇五	二五	四二年七月二日		宮城前の勤勞奉仕
一四一五	(二六〇〇)	四二年九月三日		軍人援護強化実施大綱
	(二六〇七)			

B 関連記事	番号	号数	発行年月日	項目	表題
	七	二二四七	二七年一月二七日		同志社精神の進展(海老名弾正)
	一九九	一三六三	二九年五月二日		同志社紛糾の責任(渡瀬常吉)
	三七四	二四五三	三一年二月五日		基督教主義学校の為に
	八四〇	二六九六	三五年一〇月三一日		同志社創立六十周年を迎えて(K・Y)
	九二八	二七九一	三七年九月九日		同志社の問題について
	九三四	二七九三	三七年九月二三日		同志社の問題について(岩中次磨)
	一三五二	六	四二年二月一九日		神学校の合同(龜徳正臣)
	一三九三	(二五八一)	四二年五月二八日		基督教主義学校の将来(龜徳一男)
		(二五九四)			
C 関連記事	三三一	二四三二	三〇年九月一日	投書	日曜学校当事者に望む ABC生
	六五六	二五八六	三三年九月七日		日曜学校教育の光榮とその責任

D 関連記事	番号	号数	発行年月日	項目	表題
	七一六	二六二四	三四年六月七日		認識不足の基督教幼稚園
	七二二	二六二九	三四年七月二日		基督教幼稚園問題(小立花忠勇)
	七二五	二三六一	三四年七月二六日		フレールと基督教幼稚園(大崎治部)
	五〇	二二七七	二七年八月二五日		教会合同問題に就いて(海老沢亮)
	六七	二二九〇	二七年一月二四日		日本基督教連盟の使命
	二二六	二三八八	二九年一〇月二四日		日本組合基督教会の転換期(小崎弘道)
	二六九	二四〇一	三〇年二月一三日		新島先生と教会合同問題(上)(小崎弘道)
	二七八	二四〇七	三〇年三月二〇日		新教合同の機運(海老沢亮)
	三六四	二四四八	三一年一月一日		神の国運動に就いて(上)(海老沢亮)
	三七六	二四五三	三一年二月五日		教会合同問題に就いて(海老沢亮)
	四六一	二四八三	三一年九月三日		教会一致合同の通路(海老沢亮)
	四七五	二四九一	三一年一〇月二九日		クリスチャン平和団体連盟結成私案(高橋元一郎)
	五八七	二五四七	三二年一月二日		教会合同に就いて(小崎道雄)
	七二七	二六二五	三四年六月一四日		教会合同の趨勢(野口)
	九一〇	二七六八	三七年四月一日		国体明徴と祭政一致(片山江州)
	九三八	二七九五	三七年一〇月七日		戦時に於ける宗教及伝道(K・Y)
	一〇九二	二八九七	三九年一〇月五日		合同問題と基督者の寛容(鈴木)
	一一五五	二九一七	四〇年二月二九日		事変下の基督教運動(海老沢亮)
	一二一六	二九四五	四〇年九月二日		大日本基督教会合同論(渡瀬主一郎)
	一二一八	二九四六	四〇年九月一九日		基督教の新体制(海老沢亮)
	一二三五	二九五四	四〇年一月一四日		教会合同の精神的基礎(海老沢亮)
	一二三九	二九五五	四〇年一月二二日		教会合同の根本策(賀川豊彦)
	一二四三	二九五八	四〇年一月二二日		教団新体制の理念(海老沢亮)
	一二六四	二九六九	四一年三月六日		合同問題の焦点(今泉)

旭の光

番号	号数	発行年月日	項目	表題
二二七三 二二七四 二二九〇 一三〇四 一三一八 一三三二	二九七五 二九七五 二九八六 二九九一 二九九九 三〇〇七	四一年四月一七日 四一年四月一七日 四一年七月三日 四一年八月七日 四一年一〇月二日 四一年一月二七日	講演	時局下基督教の翼賛的使命(海老沢亮) 国体と基督教(上)(中村愈) 教会合同の成立と我らの責務(平賀徳造) 基督教に於ける共栄圏の確立(海老沢亮) 合同後の我等の教会(芹野) 設立認可と我邦基督教(海老沢亮)
九 一四六 二六六 二九三 五七五 八〇三 八一九 九八八 一一二六 一一三三 一三八五	二二四八 二三四一 二四〇一 二四一三 二五四二 二六七九 二六八五 二八四一 二九一〇 二九一二 一六	二七年二月三日 二八年一月二二日 三〇年二月一三日 三〇年五月一日 三二年一〇月二七日 三五年七月四日 三五年八月一五日 三八年九月一日 四〇年一月一日 四〇年一月二五日 四二年四月三〇日	講演	大正天皇の御代(小崎弘道) 即位式の勅語を奉読して(TW生) 真宗各派の声明書を読み(今泉生) 神社問題の一断案(TW生) 神社問題(左) 同志社神棚問題と吾人の責務(石田英雄) 国体明徴と至誠奉公(KY) 仏教と神社問題(和田性海) 皇紀二六〇〇年を迎えて(KY) 日本建国の特殊性(大谷美隆) 天長佳節奉祝(海老沢亮)
一五 一九 四〇 五八 七三	二二五〇 二二五三 二二六八 二二八八 二二九八	二七年二月一七日 二七年三月一〇日 二七年六月二三日 二七年一月一〇日 二八年一月二六日	講演	三度、宗教法案に就いて(和田信次) 文部省と宗教法案(綱島佳吉) 基督教による宗教教育(緑水生) 基督教の社会的使命(海老沢亮) 大阪府民が当面したる風教問題(管亀助)
七六 八五 九九 一〇 一一三 一七四 一一一 二五二 二五五 二六二 二八四 三一九 三三三 三三四 三三六 三三八 三三七 四一〇 四一八 四二八 四六二 四六四 四七九	二三〇一 二三〇九 二三一七 二三二二 二三二六 二三五四 二三七六 二三九八 二四〇〇 二四〇一 二四一〇 二四二五 二四三〇 二四三三 二四三三 二四三九 二四四五 二四五六 二四六七 二四七〇 二四七三 二四八四 二四八六 二四九三	二八年二月一六日 二八年四月二日 二八年六月七日 二八年七月九日 二八年八月九日 二九年二月二八日 二九年八月一日 三〇年一月一六日 三〇年一月三〇日 三〇年二月六日 三〇年四月一〇日 三〇年七月二四日 三〇年八月二八日 三〇年九月一八日 三〇年九月一八日 三〇年一〇月三〇日 三〇年一二月一一日 三一年二月二六日 三一年五月一四日 三一年六月四日 三一年六月二五日 三一年九月一〇日 三一年九月二四日 三一年十一月二日	講演	軍備撤廃の要求 エルサレム会議における人種問題の討議 日本宗教学会の開催(金子白夢) 基督教と社会問題(杉山元治郎) 基督教と産業問題(久布白落実) 宗教教育と学校(緑水生) 労働主義の教育(KY) 軍縮会議近づく 総選挙と基督教徒 飽くまで娼妓を愚弄する飛田遊郭 日英海軍妥協案の成立(左) 新社会の創造と宗教(KY) 男女関係に就いて 国際的社會問題に就いて(海老沢) 倫敦条約の精神 左 世界平和の交響(左) 基督者学生青年の方向転換(安田生) 撤回せよ 労働組合法案 平和の保障(TW生) 何故の軍費か(左) 軍縮運動を促進せよ 軍縮と平和(C・B・オールズ) 国防思想振興講演会を聴く(高橋元一郎) 国際平和記念日

番号	号数	発行年月日	項目	表題
四八〇	二四九四	三一年一月一九日	廣告	当今の日支懸案(柏木義巳)
四九二	二四九八	三一年二月一七日		満州問題に就いて日支両国の基督者へ(一) 清水安三
四九三	二四九八	三一年二月一七日		満州問題を機縁に日華クリスチャンの蹶起を促す 在上海 古屋孫次郎
四九六	二四九九	三一年二月二四日		中華民国排日運動の遠因を作るもの(古屋孫次郎)
五〇五	二五〇四	三二年二月四日		軍縮会議開かる
五三一	二五一五	三二年四月二日		宗教局長の更迭と宗教法案提出問題(左)
五四二	二五二一	三二年六月二日		時局に対するクリスチャンの責任(小川隆四郎)
五四八	二五二四	三二年六月二三日		満州国の承認問題
五六六	二五三三	三二年八月二五日		ファシズムという思想(オクムラ)
五七〇	二五三六	三二年九月一五日		日曜週休運動を起せ
六二二	二五六九	三三年五月一日		宗教教育に就いて
六三二	二五七三	三三年六月八日		ナチスの宗教政策
六六五	二五九四	三三年一月二日		国民意識の勃興と基督教(榎原巖)
六九六	二六一一	三四年三月八日		日本精神の鼓舞と基督教(鈴木生)
八八四	二七三六	三六年八月一三日		国民主義と基督教(山口金作)
八九二	二七五一	三六年一月二六日		国民主義と宗教I 独逸国家主義と経験主義の關係 (青山武雄)
八九七	二七五六	三七年一月七日		国家の進運を祈る(KY)
九一八	二七八四	三七年七月二四日		文部省の通牒に就いて(今泉)
九三二	二七九三	三七年九月二三日		時局と基督教(渡瀬常吉)
九三三	二七九三	三七年九月二三日		時局と基督教(岩井義男)
九三九	二七九五	三七年一月七日		徳育と宗教教育(荒川文六)
九四〇	二七九五	三七年一月七日		基督教と我々精神主義の勃興(高橋正道)
九四四	二七九九	三七年一月四日		日本の精神文化と基督教(K・Y)
九四八	二八〇二	三七年一月二五日		国民精神総動員と日本基督教徒(椿真泉)
九六二	二八二〇	三八年四月七日		未成年飲酒禁酒法について(泉二新熊)
九七四	二八二六	三八年五月一日		基督教界と全体主義(大下角一)
一〇〇七	二八五四	三八年二月一日		宗教団体法案に就いて(日能脩太郎)
一〇三〇	二八六七	三九年三月九日		国際平和促進基督教徒世界連盟の会合其決議及アッ ピールに関して①津荷結輔
一〇三四	二八六九	三九年三月二三日		教会の社会的関心(鈴木)
一〇五八	二八八三	三九年六月二九日		八紘一宇の精神と基督教(田口重良)
一〇六一	二八八四	三九年七月六日		事変二周年を迎えて(鈴木)
一〇七七	二八九一	三九年八月二四日		基督者の時局認識(湯浅与三)
一〇八九	二八九六	三九年九月二八日		国家と宗教(今泉)
一一一七	二九〇六	三九年十二月七日		戦争の意義及共存共栄主義の弱点(KY)
一一三〇	二九一七	四〇年一月一八日		宗教団体法と基督教(芹野)
一一三八	二九一三	四〇年二月一日		道義的再装束と挺身隊の躍進(海老沢亮)
一一五六	二九一七	四〇年二月二九日		基督教日本化の問題(鈴木)
一一六九	二九二三	四〇年四月一日		基督教日本化の道(和島芳男)
一一七五	二九二六	四〇年五月二日		事変と基督教(川端忠治郎)
一一八一	二九三一	四〇年六月六日		支那に於ける基督教展開のエポック(溝口靖夫)
一一九七	二九三七	四〇年七月一八日		欧州戦乱と基督教(鈴木)
一二二一	二九四七	四〇年九月二六日		日本精神と基督教①(魚木忠一)
				基督教は何を祖国に寄与し得るか(大塚節治)
				新体制運動について(KY)

番号	号数	発行年月日	項目
二二三三	二九五三	四〇年一月七日	教学の問題について (KY)
二二八六	二九八三	四一年六月二日	八紘一宇の精神 (KY)
三三一六	二九九八	四一年九月二五日	健全なる基督教の成育 (KY)
三三三五	三〇〇九	四一年二月二日	対米英宣戦の大詔を拝して (緑水生)
三三三九	三〇一〇	四一年二月一八日	太平洋の異変と新秩序の建設 (海老沢亮)
三三四三	三〇一一	四二年一月一日	大東亜戦争と基督教者の覚悟 (中島重)
三三三三	六	四二年二月一九日	大東亜戦争と基督教の革新的要望 (渡瀬常吉)
一三五五	六	四二年二月一九日	大東亜戦争の宗教的意義
一三八〇	一四	四二年四月一六日	大東亜共栄圏と基督教の動向 (海老沢亮)
一三八二	一五	四二年四月三日	翼賛政治と基督教徒 (亀徳)
一三九二	二〇	四二年五月二八日	興亜教育と宗教教育 (海老沢亮)
一三九九	二三	四二年六月一八日	所謂猶太人問題 (海老沢亮)
一四〇四	二四	四二年七月二日	基督教の日本の性格 (二) (日高猪兵衛)

表題

二 関連記事と基督教々育同盟会

⊗ 「A 基督教々育同盟会に関する記事」と教育同盟会

「A」の記事数は少ないが、前半期と比較すると増加している。後半期に入って、どのような活動や主張が掲載されていたのだろうか。

「キリスト教育同盟の歩み」^①を見ると、教育同盟会がキリスト教系学校の主張を代表して述べたこととして、「文部省訓令第十二号の撤廃を請願」(二七年、二八年、三〇年、三一年、三二年)、「宗教教育の自由をまず私立女子校に許可するよう文部省に建議」(二七年)、「神社参拝に関して信仰の自由を要望」(三〇年)、「文部次官、教局長官と会見」(四〇年)がある。教育同盟会がキリスト教系学校の必要に応じて実施したプログラムとして、「交換教授」(二七年)「夏期講習会」「夏季学校」「雑誌発行」「聖書科教員講習会」を認めることができる。

さらに「A」から教育同盟会のいくつかの活動の詳細と、後半期における教育同盟会の立場を考えることができる。教育同盟会の活動については、聖書教授要目の作成、聖書教科書の作成、代表者の大陸訪問を伝えている。教育同盟会の戦時体制下における立場については、S・C・Mと社会的基督教に対する批判、御真影奉戴の推進とそれに消極的な一部学校批判^⑥、一部の不安を抱かせる風評を打ち消すための文部省訪問、日本人が学校経営に責任を負うことと、新しい体制に即応した精神教育や興亜教育の推進を訴えている^⑤。

要するに後半期の教育同盟会は一方でキリスト教系学校の必要に応じたプログラムに取り組みながら、他方で戦時体制下への対応を率先して指導した。その立場から時にキリスト教界における種の社会的活動を批判した

し、あるいは時局への対応の鈍いキリスト教系学校を批判した。

Ⅴ 「B キリスト教系学校に関する記事」と教育同盟会

「B」は記事数の減少が認められるが、なお掲載されている記事数は多い。

内容としては、キリスト教系学校の紹介と卒業式の報告が多く見られる。この点に限って言えば、組合教会系学校（同志社、梅花女学校、神戸女子神学校、松山夜学校、神戸女学院、松山女学校、大江高等女学校、聖友高等女学校、共愛女学校、頌栄保母伝習所など）だけでなく、それ以外のキリスト教系学校（日本ルーテル専門学校、新共同神学院、ウイルミナ女学校、恵泉女学校、東京神学社、明治学院、関西学院、鎮西学院、立教中学校、平安女学院、立教大学、フェリス英和女学院、広島女学院、青山学院、東北学院、ランバス女学院、北星女学校、神戸神学校など）も多く報告されている。けれども、分量や内容において組合教会系学校の記事が充実している。この事情は、「表三」や「表四」で紹介されたものがほとんど組合教会系学校の記事に限られていた事実を反映している。

「B」で詳細に報告されている記事から、キリスト教系学校が戦時体制下にあつてどのような時代の問題と直面していたかが分かる。その一例として、「同志社高商の神棚問題」とそれに続いて起こった事件の報道を見ておこう。

神棚問題の経緯は「同志社高商の神棚事件」に詳しい^⑤。石田英雄は神棚問題に対して、遠まわしに、同志社の対応を支持して、「私は大いに同志社の立場に同情する」と述べ、「何が同志社をそうさせたのか」と問っている^⑩。神棚事件以来、多くの難題が生じていると伝える記事「同志社の問題について」^⑪は、「序」でいきさつを紹介しなが

ら「ストライキと六名の教授、助教授の処分」を伝えている。次いで、「一 何故に自己の学園の問題を自己の学園内に於て解決し得ざりしや」で問題のいきさつをまとめている。さらに、「二 基督教と同志社」では歴史に立ち戻って「同志社とキリスト教の關係」をまとめ、「三 問題の将来性」では「団結と一致への期待」と表明し、「四 総長の覚悟」では「総長への期待」を語っている。このように記事の筆者は同志社の立場を理解し、支援している。今中次麿が寄稿した記事は、一人の教員が同志社で処分されたのではなく「惜しまれつつ職を去った」と述べ、仲間を弁明している。

戦時体制下に入ると、個々のキリスト教系学校は当局からも地域社会からも監視され、時に批判されたので、その対応に苦渋した。「同志社高商の神棚問題」などの論説は、同志社が苦渋したいくつかの問題を取り上げ、問題について説明し、対応においては同志社を支持していた。

戦時体制が進むと、キリスト教系学校が時代の問題に直面したことを『基督教世界』は示している。それに対し、教育同盟会が当局からの指導や地域社会の批判を受けて苦渋する姿は伝えていない。報道しているのはむしろ、状況に巧みに対応し、戦時体制への対応をキリスト教系学校に指導する教育同盟会の姿である。

Ⅵ 「C 日曜学校運動などキリスト教教育に関する記事」と教育同盟会

後半期に入って記事数を減少させたのが、「C」である。「C」の減少は記事数だけでなく、その扱い方にも違いが認められる。前半期には日曜学校協会の関連記事が詳細に時には数頁にもわたって報告されることがあった。しかし、後半期にはそのように詳細な報告はない。

掲載された記事の内容を見ると、その多くは各地域における活動報告であり、あるいは教師養成のためのプログラムや夏期学校に関する記事も多く見られる。「表三」で史料として取り上げたのは、いずれも日曜学校協会大会を伝えていた記事である。¹³これらの記事は日曜学校協会大会の様子を伝えている。それによると、前半期にすでにそうであったように、天皇制国家体制に順応しながら、日曜学校協会固有の課題に取り組んでいたことが分かる。「C」によると、一九三九年までは日曜学校協会の組織は保たれており、活動も継続されていた。¹⁴事情は各地域においても同様であった。日曜学校協会についてはまた、時代状況から生じた問題とのキリスト教系学校に見られた苦渋に満ちた対応などは報じられていない。日曜学校の地域社会に対する影響が、キリスト教系学校に対して小さかったためであろうか。

日曜学校協会の時代状況への対応や活動内容については、教育同盟会との類似を見ることができるといえる。

④ 「D キリスト教の団体や運動に関する記事」と教育同盟会

後半期に大きく記事数を伸ばしたのは、「D」である。この事実は、後半期に『基督教世界』がキリスト教団体やその活動に強い関心を持ったことを示している。その強い関心は何であったのだろうか。一端を後半期の記事で新たに扱われた団体や運動から知ることができよう。「表三」からその対象となる団体と運動を抜き出してみた。次の通りである。

① 同志社労働者ミッション¹⁵

- ② 神の国運動¹⁶
- ③ 農村問題研究会¹⁷
- ④ 社会的基督教関西連盟¹⁸
- ⑤ 日本福音学校¹⁹
- ⑥ 市民福音学校²⁰
- ⑦ 基督教保育連盟講習会²¹
- ⑧ 婦選獲得同盟²²
- ⑨ 皇軍慰問事業所²³
- ⑩ 社会的基督教²⁴
- ⑪ 基督教報国団²⁵
- ⑫ 日本基督教連合会²⁶
- ⑬ 満州基督教開拓村²⁷
- ⑭ 南京日華基督教連盟²⁸
- ⑮ 朝鮮基督教連合²⁹

後半期に新たに加えられた団体や運動には二つの傾向がある。この傾向が『基督教世界』誌の関心を示している。一つは時代状況の影響を受けながらも、キリスト教固有の立場から立ち上げられた団体や運動である。上記の①

②③④⑤⑥⑦⑧⑩」がそれに該当する。もう一つは戦時体制への対応から生まれた団体や運動である。「⑨⑪⑫⑬⑭⑮⑯」がこれにあたる。これら二つの傾向を持った団体と運動を時系列で見ると、後半期の早い時期にはキリスト教の立場から立ち上げられたものが多く、遅くなると戦時体制に応じたものが立ち上げられていたことが分かる。

一連の記事から、『基督教世界』の性格を語るものがある。「社会的基督教」に関する記事である。先に教育同盟会がS・C・Mと社会的基督教を批判する記事を見た。その記事が掲載されたのは、一九三二年である。ところで、その前後の一九三一年と一九四〇年に『基督教世界』は社会的基督教を支持する立場から掲載している。戦時体制に順応した教育同盟会に対して、『基督教世界』はその時期にある種の危険を犯してでも基督教の運動を取り上げる姿勢を持っていたと言える。

基督教連盟が公にした声明は、戦時体制下におけるキリスト教系団体の動向をよく表している。関連する記事は、その内容から二種類に分別できる。第一の種類に分類される記事は、各国の基督教と連携しながら世界の平和を確保していこうとする³⁰⁾。それに対して、第二の種類に分類される記事は、戦時体制への対応をはっきりと示し、もはや外国の基督教と連携する姿勢を持たない³¹⁾。このような姿勢の違いが現れたのは、基督教連盟の場合、日中戦争(一九三七年)を境界としている。

戦時体制への順応をめぐって、教育同盟会には基督教連盟のようなはっきりとした分かれ目が認められない。教育同盟会の場合、もう少し早い時期に、たとえば「御殿場における基督教々育同盟会主催の夏期学校」(『基督教世界』第二五三一号、一九三二年八月十一日)にその傾向が現れており、その後この傾向を強めたと見ることができ³²⁾る。

㊦ 「E 皇室や神道に関する記事」と教育同盟会

「E」は、後半期における天皇制国家に対するキリスト教団体の対応をよく伝えている。キリスト教団体は、前半期からそうであったように、天皇制国家への忠誠を示していた。それに対して当局は、後半期には、さらに徹底した天皇制国家への従順を求めて圧力をかけてきた。そこに生じた典型的な問題の一つが神社不参拝問題と見ることが³³⁾できる。

そこで、神社不参拝問題をめぐる一連の記事を見ておこう。後半期に入った当初、基督教界は神社問題に対する立場を率直に表明していた³⁴⁾。当局は、しかし、基督教界の要望を聞くのではなく、神社不参拝問題を手がかりとして圧力をかけてきた。そのような一連の出来事として、『基督教世界』はキリスト教会に関する記事³⁵⁾、カトリック系学校に関する記事³⁶⁾を報じている。このような圧力が、一九三一年以降にカトリック教会を含む基督教会とキリスト教系学校に対する圧力となったことはいうまでもない。

当局はさらに朝鮮で神社不参拝問題を取り上げ³⁷⁾、『基督教世界』については文部省通達の靖国神社参拝の呼びかけを掲載している³⁸⁾。

一連の当局による圧力が、どのように教育同盟会に影響したのかは分からない。しかし、一九三〇年代以降の教育同盟会に相当の影響を与えたことは十分に考えられる。

㊦ 「F その他の関連記事」と教育同盟会

後半期における「F」の特色の一つは、「表三」にあげられた関連記事の多さである。前半期では「F」に分類された論説が、「表四」に多く挙げられていた。後半期になると「表三」にも史料的価値をもつ「F」の記事が多く挙げられている。内容を見ると、宗教団体の史料、ナチス・ドイツの史料、その他当局の通達などがある。

「表四」を見ると、「F」に分類された論説が他を圧倒している。量的に見ても、全体の約三分の二を「F」が占めている。内容も多彩で、宗教法案、基督教の社会的使命、軍備縮小と平和問題、総選挙、男女関係、ファシズム、日本精神と基督教、時局と基督教などを扱った論説である。これらは『基督教世界』誌上で活発な論説活動が、後半期にも広げられていたことを示している。

ここでは、太平洋戦争勃発直後の論説と見解を見ておこう。これまでの検討から戦時体制下のキリスト教には二つの側面があることが分かった。体制に順応することとそうで可能なキリスト教活動を継続することである。戦時体制が最も高揚した時期の一つは太平洋戦争勃発時であろう。その時にキリスト教界は自らをどのように理解し、また論じていたのだろうか。

「大東亜戦争に対する心構え」(『基督教世界』第六号(第二五八一号)、一九四二年二月十九日)にまとめられた指導者の見解には、体制への順応とキリスト教活動を一組とみなした見解が多くある。吉崎敏雄・藤崎五郎・小崎道雄・伊藤興雄・大野寛一郎にこの理解が認められる。山形国義と中村万作には、日本的キリスト教への言及がある。

論説を見ると、戦時体制の見解を前面に出し、その枠内にキリスト教を位置づけているものがある。海老沢亮がその立場である。⁽³⁷⁾ それに対して、中島重は、戦時体制の枠組みを承認しながらも、そのことに多くを割かない。むしろ、枠組みの中で中島自身のキリスト教理解を多く述べている。⁽³⁸⁾ 他方、渡瀬常吉は、日本のキリスト教の探求を主張している。⁽³⁹⁾

戦時体制下にあつて、キリスト教はその社会的枠組の中で発言するしかなかった。しかし、「F」を検討すると、その内容が一樣ではなかったことが分かる。体制の枠組みに身を置きながら、なお各自が信じるキリスト教とその可能性を論じ主張していたからである。

戦時体制下における「F」の多様性は、この時期の教育同盟会を特色付けている。教育同盟会や基督教連盟は戦時体制が進むと、融通が利かないまでにその枠組みの中に自らをおいた。キリスト教界を代表する諸団体にとって、融通の利かないまでに体制に順応することが組織を守る手段であったと考えられる。それに対し、『基督教世界』誌には、同じ枠組みに身を置きながらも、まだ多様な発言をしていたと言えよう。

三 結 語

後半期の『基督教世界』に見出される一連の関連記事は、戦時体制下における教育同盟会に二面性が認められることを示していた。戦時体制への順応とその枠内でのキリスト教活動の継続である。

戦時体制への順応に関して、教育同盟会と類似した対応を示したのは、基督教連盟と日曜学校協会である。これらの団体もまた、体制に対応することによって、組織が担った課題を遂行しようとした。

教育同盟会と時に違った対応を示したのが、個々のキリスト教系学校やキリスト教団体あるいは、『基督教世界』

誌である。

いずれにしても、戦時体制に対応したことは、ある程度まではキリスト教の教育活動を継続するための手段であったと思われる。しかし、どこまでが手段であり、どこからが主体性を失った協力であったのかは、判別が難しい。戦時体制下における教育同盟会の位置と役割を明らかにした上で、教育同盟会自身が自らの歴史に対する評価を下すことが求められている。

注

- (1) 追加資料として用いたのは、次のものである。
「基督教学校教育同盟の歩み」『日本におけるキリスト教学校教育の現状』三三八―三四二頁。
聖書教授要目の作成については、次の記事に言及がある。
- (2) 「日本基督教々育同盟関西教育研究委員会」『基督教世界』第二二五号、一九三二年六月三十日。
「御殿場に於ける基督教教育同盟会主催の夏期学校」『基督教世界』第二五二号、一九三二年八月十一日。
聖書教科書の作成については、次の記事に言及がある。
- (3) 「日本基督教々育同盟関西教育研究委員会」『基督教世界』第二二五号、一九三二年六月三十日。
「緊急裡に協議を進めた基督教々育同盟会総会」『基督教世界』第二八三〇号、一九三八年六月十六日。
教育同盟会代表者の大陸訪問については、次の記事に言及がある。
- (4) 「教育同盟代表大陸訪問派遣」『基督教世界』第二九号（二六〇四号）、一九四二年八月六日。
教育同盟会のS・C・Mと社会的基督教に対する批判は、次の記事に言及がある。
- (5) 「御殿場に於ける基督教教育同盟会主催の夏期学校」『基督教世界』第二五二二号、一九三三年八月十一日。
御真影奉戴の推進とその件に消極的な一部学校に対する批判は、次の記事に言及がある。
- (6) 「御殿場に於ける基督教教育同盟会主催の夏期学校」『基督教世界』第二五二二号、一九三三年八月十一日。

- (7) 一部の不安を抱かしめる風評を打ち消すための文部省訪問については、次の記事に言及がある。
「基督教々育家と文部大臣の会見」『基督教世界』第二九三九号、一九四〇年六月十三日。
新体制に即応した精神教育、興亜教育を樹立することについては、次の記事に言及がある。
- (8) 「樹立されんとする基督教新体制」『基督教世界』第二九四五号、一九四〇年九月十二日。
「同志社高商の神棚問題」『基督教世界』第二六七八号、一九三五年六月二七日。
- (9) 「同志社高商の神棚問題」『基督教世界』第二六七八号、一九三五年六月二七日。
- (10) 石田英雄「同志社神棚問題と吾人の責務」『基督教世界』第二六七九号、一九三五年七月四日。
- (11) 「同志社の問題について」『基督教世界』第二七九一号、一九三七年九月九日。
- (12) 今中次磨「同志社の問題について」『基督教世界』第二七九三号、一九三七年九月二三日。
日曜学校協会の大会を伝えていた記事は、次の通りである。なお、第二六七一号は、「第二十回日曜学校大会」を誤って「第二十二回」としたと考えられる。
- (13) 「日本日曜学校協会第十六回大会」『基督教世界』第二五五八号、一九二七年四月十四日。
「第二十二回日本日曜学校大会」『基督教世界』第二六七一号、一九三五年九月九日。
「名古屋に開かれたる第二十一回日曜学校大会」『基督教世界』第二七七一号、一九三七年四月二十二日。
「第二十二回日本日曜学校大会記」『基督教世界』二八七二号、一九三九年四月十三日。
一九三九年に開催された日曜学校協会の大大会を報じる記事が、当時の組織や活動状況を知らせている。
- (14) 「第二十二回日本日曜学校大会記」『基督教世界』二八七二号、一九三九年四月十三日。
同志社労働者ミッションについては、次の記事に史料がある。
- (15) 「同志社労働者ミッションの設立」『基督教世界』第二三九八号、一九二八年一月二六日。
神の国運動については、次の記事に史料がある。
- (16) 「神の国運動宣言」『基督教世界』第二三九〇号、一九二九年十一月十四日。
農村問題研究会については、次の記事に史料がある。
- (17) 「第一回農村問題協議会宣言」『基督教世界』第二四七七号、一九三二年七月二三日。
「社会的基督教関西連盟成る」『基督教世界』第二四八八号、一九三二年十月八日。
- (18) 「社会的基督教関西連盟成る」『基督教世界』第二四八八号、一九三二年十月八日。
日本福音学校については、次の記事に史料がある。
- (19)

- (20) 「日本福音学校開校」『基督教世界』第二千五百五号、一九三二年二月十一日。
市民福音学校については、次の記事に史料がある。
- (21) 「盛大なる第一回市民福音学校」『基督教世界』第二千五百五号、一九三二年四月二二日。
基督教保育連盟講習会については、次の記事に史料がある。
- (22) 「第一回基督教保育連盟講習会」『基督教世界』第二千五百三十三号、一九三二年八月二五日。
婦選獲得同盟については、次の記事に史料がある。
- (23) 「婦選獲得同盟の方針」『基督教世界』第二千七百〇八号、一九三六年一月三十日。
皇軍慰問事業所については、次の記事に史料がある。
- (24) 「皇軍慰問部 慰問袋内容の参考」『基督教世界』第二千七百八八号、一九三七年八月十九日。
社会的基督教については、次の記事に史料がある。
- (25) 「社基大会及び特別講演会」『基督教世界』第二千九二六号、一九四〇年五月二日。
「苦難の時代的理解 社基大会の主題」『基督教世界』第二千九七九号、一九四一年五月十五日。
基督教報国団については、次の記事に史料がある。
- (26) 「基督教報国団の結成」『基督教世界』第二千九九五号、一九四一年九月四日。
「基督教報国団組織」『基督教世界』第二千九八八号、一九四一年九月二五日。
- (27) 「日本基督教連合会」については、次の記事に史料がある。
日本基督教連合会については、次の記事に史料がある。
- (28) 「満州基督教開拓村」『基督教世界』第四号(第二千五百七九号)、一九四二年二月五日。
「満州基督教開拓村 順調に進展す」『基督教世界』第二千四百号(第二千五百九九号)、一九四二年六月二五日。
南京日華基督教連盟については、次の記事に史料がある。
- (29) 「南京日華基督教連盟の創立」第十四号(第二千五百八九号)、一九四二年四月十六日。
朝鮮基督教連合については、次の記事に史料がある。
- (30) 「強化奉公を旨とし朝鮮基督教連合総会」『基督教世界』第十五号(第二千五百九〇号)、一九四二年四月三日。
基督教連盟の声明で、世界の平和を確保しようとしたものを報道した記事は次の通りである。

- (31) 「満州事変と基督教連盟」『基督教世界』第二千四百九二号、一九三二年十月二九日。
「欧米各国基督教団体に対して 日本基督教連盟 常議員会」『基督教世界』一九三二年四月二八日。
「時局に関する進言」『基督教世界』第二千五百二六号、一九三二年四月二八日。
「平和確保に関する宣言 全国基督教協議会 日本基督教連盟」『基督教世界』第二千五百四八号、一九三二年十二月八日。
基督教連盟の声明で、戦時体制への対応を顕著に示している記事は次の通りである。
- (32) 「基督教連盟の時局に関する声明」『基督教世界』第二千八百〇四号、一九三七年十二月九日。
「国民精神総動員新展開の基本方針に対する基督教の実施教科案 日本基督教連盟」『基督教世界』第二千八百二二号、一九三九年八月三日。
- (33) 神社問題に関する基督教関係者の率直な表明を伝えたものとして、次の記事がある。
「神社問題と基督教連盟」『基督教世界』第二千四百二二号、一九三〇年四月二四日。
「神社問題に関する進言」『基督教世界』第二千四百一七号、一九三〇年五月二九日。
神社不参拝問題に関して、プロテスタント教会に対する圧力と考えられる出来事を伝えたものとして、次の記事がある。
- (34) 「大垣のミッションを教会と認めぬ」『基督教世界』第二千四百六八号、一九三二年五月二一日。
神社不参拝問題に関して、カトリック系学校に対する圧力と考えられる出来事を伝えたものとして、次の記事がある。
- (35) 「カトリックの御難 海星中学校からも配属将校を引き揚ぐ」『基督教世界』第二千五百六号、一九三三年二月九日。
「配属将校の引揚げから 上智大学さわぐ!」『基督教世界』第二千五百七号、一九三三年二月十六日。
「暁星中学校長が文部省へ嘆願書」『基督教世界』第二千五百七号、一九三三年二月十六日。
朝鮮における神社不参拝問題を伝えるのは、次の記事である。
- (36) 「神社不参拝問題に対する朝鮮総督府の通牒」『基督教世界』第二千七百一六号、一九三六年三月二六日。
「基督教世界」が靖国神社参拝の呼びかけを掲載したのは、次の記事である。
- (37) 「靖国神社の臨時大祭に際し全国民の黙祷を希望す」『基督教世界』第二千八百二二号、一九三八年四月二一日。
海老沢亮「太平洋の異変と新秩序の建設」『基督教世界』第三〇一〇号、一九四一年十二月十八日。
- (38) 中島重「天意我に在り、我又天意に則らねばならぬ」『基督教世界』第三〇一一号、一九四二年一月一日。
- (39) 渡瀬常吉「大東亜戦争と基督教の革新的展望」『基督教世界』第六号(第二千五百八一号)一九四二年二月十九日。